

2020年度 佐久長聖中学 自己評価

学校教育目標	中・長期的目標	今年度の重点目標
1. 礼節を重んじ、忍耐強く、誠実な人材の育成を図る。 2. 一人ひとりの個性を尊重し、授業・クラブ活動・館(寮)生活を通して豊かな教養・感性・心身の健康を身につける。	1. 積極的、自主的な態度を養う。 2. 一人ひとりが文武両道を実現できる環境を整える。 3. 校外から理解・支援される教育活動を展開する。 4. 世界で活躍できる人材が育つ環境を整える。	1. 魅力ある授業が生徒に提供できるための教科指導の研鑽に努める。 2. 生徒の進路実現に向けて、進路指導体制の発展に努める。 3. 生徒との前向きな対話のある生活指導・学級運営を行う。 4. 心身ともに健康で明るい学校生活をが送れるよう、生徒の人権を尊重し安心安全な学校づくりを進める。 5. 学校の特色をアピールできるように積極的に情報発信を行う。

評価・・・A:十分 B:概ね十分 C:やや不十分 D:不十分

評価項目	評価の観点	評価	具体的取組状況・成果	課題・問題点	
1	学習指導	大学入試改革に対応した具体的な取り組みができたか。	B	■大学入試問題を参考にした問題を考査に取り入れるなど、将来を見据えた取り組みができた。 ■知識だけでなく記述力や思考力を身につけられるような工夫をした。 ■答えだけでなく、求め方を説明できるようになることが必要だと意識づけた。 ■中学1年生には学習の仕方を習慣づけすることに重きを置いて授業をした。	■データ処理や複数文章の読み取りの演習ができなかった。 ■コロナ禍で理科室での実験を行えない中、実感的に伝えられる方法を模索していきたい。 ■大学入試共通テストを見ると、英語学習には多読・速読を通して速く情報を処理する能力が求められており、これに対応できる授業を早急に考えなくてはならない。
		アクティブラーニング(AL)・ICT機器活用等の授業改善をしたか。	B	■ICT機器を活用し、授業改善に努めた。 ■ロイノートを使用して課題を配信したり授業を展開したりした。 ■ICT機器活用については不十分であった。 ■生徒同士で教え合いや話し合いを行わせ、生徒の考え方や視野を広げる機会を設けた。 ■リモート授業で力を発揮できた。	■ICT機器を活用できる場面について、引き続き研究していきたい。 ■アクティブラーニングは感染症が収まればどんどん実施していきたい。 ■ICT機器については学校でもっと設備を整えてほしい。 ■毎回の機器の運搬や設置が負担になっている。 ■生徒同士がより活発な意見交換ができるように発問を工夫したい。
		中高一貫教育の特性を生かした指導や教育課程の見直しを行ったか。	B	■必要に応じて高校での学習内容を取り入れて、興味・関心を引き出せるようにした。 ■常に大学受験を意識させるような話をした。 ■シラバスに沿った指導ができていた。 ■学年によって、生徒の力に合わせて、どこまで高校内容など発展的な内容に触れるかを変えている。 ■コロナ禍ならではの新しい授業内容が発見できた。	■高校内容を紹介すると学習進度が遅くなる傾向があるので、進度面の工夫が必要。 ■高校との連携(合同教科会など)を定期的に行う必要がある。 ■生徒の予定が詰まっており、個別フォローのための時間捻出が難しかった。 ■中高での連携、ある程度の共通認識・方向性の共有がさらに必要と考える。
2	進路指導	計画的・戦略的に組織的な進路指導ができたか。	B	■中1は、まだ組織的な進路指導の段階ではないが、折に触れて大学、その先の職業の話をした。 ■考査前の計画表や考査後の振り返り、テスト返却時の面談を通して学習をサポートできた。 ■高校進級前に身につけておきたい学習習慣や具体的な力について、理由も含めて意識させるように指導した。	■1年生には、5年後はまだ遠い未来であり、現実味を持たせるのは難しい。 ■数学でも、文章から読み取り、事象を理解していくということが重要となっていくので、学習問題をより一層工夫していきたい。 ■高校との連携を密にしていく。
		保護者と連携した個に応じた進路指導ができたか。	C	■保護者からの相談、面談希望があったときに、迅速かつ丁寧に対応できた。 ■本人の意思を尊重しつつも、現実的な進路選択ができた。 ■学級担任と連携しながら、保護者からの相談に対応することができた。 ■保護者と情報を共有し合い、生徒一人ひとりの現状を適切に把握することができた。	■特に県外生や館生について、学校での様子をこまめにお伝えするように努めなくてはならない。 ■部活動顧問とも連携していく必要がある。 ■保護者の考える生徒の将来像と、生徒個々が考える将来像をすりあわせるところまではできなかった。 ■定期的な面談以外に、個々の状況に応じた面談を随時実行する。
		生徒の自己啓発につながるキャリア教育であったか。	B	■授業の折に触れて、将来の進路に関わる情報を提供した。 ■新聞のコラムや記事を定期的に読ませた。 ■クエスト活動を通して、実際の企業に触れ、答えのない問いに立ち向かう機会を作ることができた。また、社会で問題となっていることが何かを考える機会も提供できた。	■生徒の自己啓発につながるような時事ネタや話題を用意し、身近なものとして考えさせる機会を増やしたい。 ■授業やホームルームなどで、社会情勢に関連した話題を話す機会を増やしたい。 ■生徒の振り返りを継続して取り上げていくとともに、広い視野を持てるような話題を与えていくこと。
3	生徒指導	いじめや暴力のない安全な学校生活を送るための啓発活動ができたか。	B	■日々の生徒との関わりを大切にしたり、道徳の時間などを使ったりしていじめの未然防止に努めた。 ■授業や部活動を通して、安全な学校生活を送るための啓発を行った。 ■道徳の教材を使用した授業を、実際にクラス内で発生している事案と関連づけながら、考える機会を与えることができた。	■特にスマートフォンを使ったSNS関連のいじめについては、発見が難しく、また対応も一段と難しいと感じている。 ■意図せずに相手を傷つけていることも考えられるので、面談の機会を利用し、友人関係を注視していきたい。 ■学校と館との連携をさらに深めていくこと。
		体罰や暴言のない安心な学校づくりができたか。	A	■体罰や暴言を行ったり、目にする機会はなかった。 ■以前から体罰や暴言のない安全な学校づくりに心がけてきた。 ■教師として体罰はもちろん、暴言や生徒の人格を否定するような言葉を発しないように細心の注意を払っている。 ■生徒の話聞きながら対話ができるように心がけた。	■生徒間での暴言や悪ふざけについて、休み時間に観察するようにしたい。 ■全員が安全で安心して学校生活を送るためには何が必要かを生徒に考えさせ、行動させる仕組みが必要である。 ■不用意な一言で生徒を傷つけていないかさらなる注意が必要。
		校内外での安全・トラブル(SNS含む)に注意できているか。	B	■機会あるごとに啓発をしてきた。 ■学期ごとに生徒・保護者に注意を喚起している。 ■放課後の教室や各階の見回りを分担して行っている。 ■SNSでのトラブルの訴えはごくわずかであったが、対処することができた。 ■校内での危険やトラブルに繋がる事象は少ない。	■外部講師による講演会や講話を定期的に行いたい。 ■家庭ごとにスマートフォン等の使用のルールが異なり、問題が起こっているときに気づくことは難しいことが多い。 ■見えない部分が多すぎるので、そこをどうクリアしていくかが課題である。 ■休み時間や放課後の生徒の動きを把握する。
4	保護者連携 地域連携	ホームページ・Classiなどで積極的に学校情報の発信ができたか。	B	■可能な範囲で情報発信に努めた。 ■コロナ禍で公開できなかった文化祭を保護者に動画配信できたのはよかった。 ■印刷物やClassiを通して、学年やクラスの動静について発信するように努めている。 ■学級通信のほか、考査成績もClassiで配信できた。	■学年行事があったときに、ホームページで発信していきたい。 ■ICTの導入が遅れており生産性が低い。積極的に活用して、学校も保護者も地域もより便利でより本来の教育活動へ注力できるようにしたい。 ■保護者の方が関心ある情報や時節に応じた情報をピックアップし、タイムリーに発信していきたい。
		保護者や外部からの声に対してきちんと対応・返答できたか。	B	■保護者から学習の遅れやフォローの相談があった際は、放課後の時間を活用してできる限り指導を行った。 ■平日や休日、時間を問わず、保護者の要望に対して迅速に対応することができた。 ■「帰宅書」などでいただいた声を教育活動に取り入れることができた。	■データベース化することで問題への先回り対応など、さらに教育活動の充実が図れると考える。 ■今後も引き続き誠意をもって対応する。 ■後回し、先送りしないよう、初動を大切に对应していく必要がある。 ■何もなくても保護者とコミュニケーションをとり、関係を深めたい。
		説明会・オープンスクール・学校訪問など積極的な募集活動ができたか。	B	■学校説明会での個別相談、知人・卒業生などからの問い合わせには誠実に対応した。 ■コロナの影響もあり、例年通りには行えなかったが、オンライン説明会や文化祭の動画公開などを取り入れ、学校をPRすることができた。 ■部活動などの対外的な場所で、学校の良さを伝えることができた。	■地元の優秀な生徒を確保するためには、地元の学習塾や小学校への訪問を活発に行う必要がある。 ■県外入試については、日程・宣伝周知等、塾の意見を参考にしながら活動していきたい。 ■職員一人ひとりが積極的に関わっていかねばならない。 ■コロナ禍での募集活動のあり方を検討していきたい。